

あきらくん、プロローグ

せみの声が遠い。

パパにぶたれたほっただけがジンジンと熱くてひりひりする。

今日はぼくの算数のテストが100点じゃなかったから。

98点だったから。

だからお家に入れてもらえない。

お日様はどんどん沈んでいく。

世界の中から放り出されたみたい。僕はひとりぼっちだ。

僕が悪いから、悪いんだけど、僕が。テスト100点取れなかったから、悪いのは僕のはずなんだけど。

それはちゃんと分かっているのに、涙が止まらない。

誰も、誰も、誰も僕を抱きしめてくれない。

ああ、せみの声が遠い。

「どうしたの。」

ぬるい風に乗って僕の耳に届いた柔らかい声。

びっくりして顔を上げると僕よりも小さな女の子が立っていた。

「…誰、君…。この近所の子…？もうこんな時間なのに…。」

外で遊ぶにはもう随分日が傾いている。

こんなに小さいのに…。

…ひよつとすると、この子も一人ぼっちなのかな。

そうだったら僕たち、お友達になれるかもしれない。

「もしかして…、君もおうちに帰るとパパやママに怒られるの！？」

絶るような思いで問いかけると、女の子は小さな頭を可愛く横に振った。

それから一生懸命自分がなぜこんな時間まで公園にいるのか説明してくれた。

「……そう。…ママもパパもお仕事で遅くなるから…今日だけ…、ね…。…ふーん。」

なんだ。なんだ、やっぱり。一人ぼっちは僕だけなんだ。

パパもママも、名前も知らないこの子も、僕の傍にいてくれない。

せり上がってきた涙を堪えようとしたらぐすん、と鼻が鳴った。

すると女の子は持っていた花柄のポシェットをぐそぐそと探り、幼い手を僕に差し出してきた。

「…ん？何？」

開かれた温かそうな手の平の上には。

「…絆創膏…？」

テレビで見慣れたキャラクターがくつついた絆創膏が一枚。

涙で濡れた顔を上げると、心配そうな瞳と目が合った。

あ、かわいいな、この子。

「…これ…、…僕にくれるの？」

その子は何度もうんうんと頷きながら、痛いのとんでは、と一生懸命おまじないをかけてくれた。

僕、テスト100点取れなかったのに。

「あ…。…違うよ、どこも怪我してない。…痛そうに見える?」

うん、とっても痛そうだよ、と戸惑いながら僕の質問に答える可愛い声に胸のところが
いっぱいになる。

絆創膏を受け取ると指先がじんわりあったかくなっていった。

「…ありがとう。…お家にいるといっぱい怪我するけど、…絆創膏なんてもらったこと
ない。…ありがとう。」

不思議だな。さっきまで寂しくて寂しくてどうしようもなかったのに。

ママだってテストで100点を取らないと抱っこしてくれないのに、この子はできそ

こないの僕を心配してくれて、絆創膏をくれて、おまじないまでかけてくれた。

この子、この子なんだ、きっと。

ママでも、パパでもない。

この子ならきっと僕の事を本当に好きになってくれる。

100点取らなくても、僕をぎゅってしてくれるかもしれない。

「…ねえ、明日もここに来る？来てよ。遊ぼうよ、僕と。」

この子を誰にもあげたくない。

僕が独り占めしたい。

だって、だって僕にはこの子しかいないんだもん。

僕に絆創膏をくれたのはこの子だけなんだもん。

あ、そうだ、この子にお嫁さんになってもらえばいいんだ。

すっごくいいかもしれない。

ママやパパじゃなくて、この子と家族になったら僕、もう一人ぼっちじゃなくなる。

うん、すっごくいいな。

「僕は…あきら…、…いや、にーについて呼んでいいよ。」

にーに？と小さく首を傾げる仕草にどきんと心臓が跳ねる。可愛い。

「ね、ね？明日も遊ぼう。絶対ここで会おうね。」

お願い、僕をもう独りにしないで。